2019年8月8日 執筆

# 主要国の現況と当面の相場見通し



有限会社フォレックス・ラジオ 代表取締役 だいまん氏 執筆

# 特別レポート

未来の為のタネがある



# 「主要国の現況と当面の相場見通し」

2019年8月8日

有限会社フォレックス・ラジオ 代表取締役 文一雄氏 執筆

# 【主要国の現況】

主要国のファンダメンタルズを見る場合、物価指数や雇用統計、設備投資や在庫、住宅指標など多くの基礎データーをチェックすることが必要ですが、為替を取引する場合、経済学者でもない私たちには、分析能力にも限界があますので、ここでは、簡単にファンダメンタルズの動きを象徴する株価や長期金利の動きを中心に解説させて頂きます。

#### 《米国》

米国は、リーマンショックからFRBの歴史に例を見ない金融緩和の効果もあって、いち早く立ち直りました。トランプ政権の減税やインフラ投資などの対策も功を奏したでしょうが、一方でトランプ大統領は、貿易赤字解消のために、通商問題で、貿易相手国への攻撃を続けています。

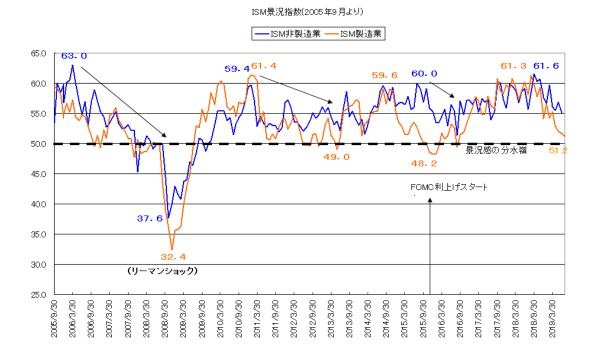
以下が直近の米国の貿易赤字の推移です。

トランプ政権になって、TPPとNAFTAの離脱に加えて、関税の引き上げ策を強行していますが、全く貿易収支の改善が見えていないことがわかります。過去米国の貿易赤字は、サービス業中心の米国の構造的な問題で、1985年のプラザ合意以降、為替調整や政治的な圧力でも、改善できないことは明白です。また、米国は、貿易赤字を作ることによって、逆にドル安などメリットを甘受してきた面もあります。こうった点がトランプ大統領に理解されず、通商交渉での強行姿勢が、今後も続くなら、米経済にも良い影響はありません。

米貿易収支の推移(2011年より)

米国の景況感を見る上では、企業のアンケート調査となるISMが発表する製造業と非製造業の景況感指数が、もっとも実勢を反映していると思います。

以下がその推移となりますが、過去総じて「60」に近い数字がピークとなって、その後減少している形が 見えます。現在も「60」台の高値をつけて、減少傾向が見えています。総じて良好な米経済としても、貿 易戦争の悪影響は避けられない状況です。



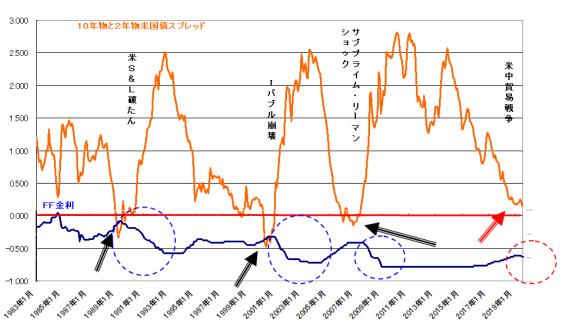
また、米国の10年物国債利回りの推移を見てみましょう。 FOMCの利上げ姿勢もあって、一時3.24 8%まで上昇した長期金利も、現在は2%割れまで大きく下げています。

債券市場の動きは、為替や株式市場と異なり、合理的な市場と言われています。また特に米国国債の 市場は、世界でも最も取引量が多く、米国の債券利回りが低下しているということは、市場の多くの参加 者が、米国の景気も一旦ピークをつけたとみている可能性が高いことになります。



米国10年物国債利回り月足(2003年より)

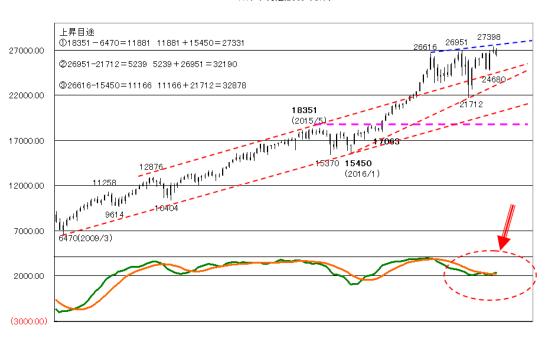
また、以下のチャートは、米国の10年物国債と2年物国債の利回り差とFF金利の推移を示したチャートです。 通常は期間の長い10年物国債利回り方が、金利が高いですが、これが逆転(10年債利回りが2年物利回りを下回る)するケースが、過去、何回が発生しています。それぞれ、いろいろ要因がありますが、その場合1年から1年半後には、景気後退に陥ると言われています。また、それに合わせてFOMCも、過去利下げサイクルに突入しています。では、今回はどうでしょうか? 現状瞬間的な逆転はありましたが、定着までには拡大していません。ただ、7月にはFOMCが予防的な利下げを行っています。現状連続利下げをするかは不透明ですが、今後景気減速となる可能性は高いかもしれません。



米国10年物国債と2年物国債利回りスプレッド(1983年より)

ただ、米国の場合は、FRBが早期に金融の正常化を実施していることから、金融緩和の余地が十分あります。また、FRBの資産買い入れの縮小も進んでおり、QEの再開、更にマイナス金利の導入など対応策も可能です。もし、景気後退が始まったとしても、FRBが、適切に対応するなら、先進国で、最も安定した経済を続けることが可能でしょう。

以下NYダウの月足チャートをご覧ください。歴史的な高値圏にあって、上値は神経質な展開ですが、FRBの金融緩和期待が相場を支えています。テクニカル面でも、下段のオシレーターが、価格の維持を示しています。一部に、緩和期待が相場を支えているだけで、将来のバブルの危険性も指摘されていますが、現状は25000ドル前後がサポートするなら堅調が続きそうです。



NYダウ 月足(2009年より)

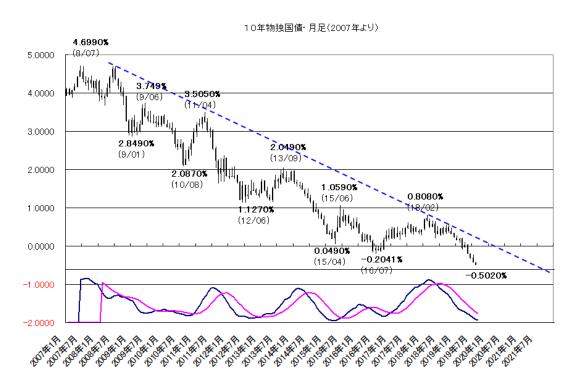
#### 《ユーロ圏》

ユーロ圏の経済は、リーマンショック、欧州信用問題を経て、2017年には、一旦立ち直りの兆しを見せましたが、それもポピュリストの台頭による政治不安、イタリアの財政問題、フランスの労働問題、ドイツでは、フォルクスワーゲンやドイツ銀行などの一流企業の不祥事に加えて、中国の景気減速などによって、再び景気の落ち込みが顕著となっています。

以下がユーロ圏のPMI(購買部担当者景気指数)の推移ですが、ご覧のように2017年をピークに調整が強まっています。まだサービス業は、景気の分水嶺となる「50」を割り込んでいませんが、製造業は既に「45」という下限レベルに近づいています。今後もこういった状況が続く可能性が高いでしょう。

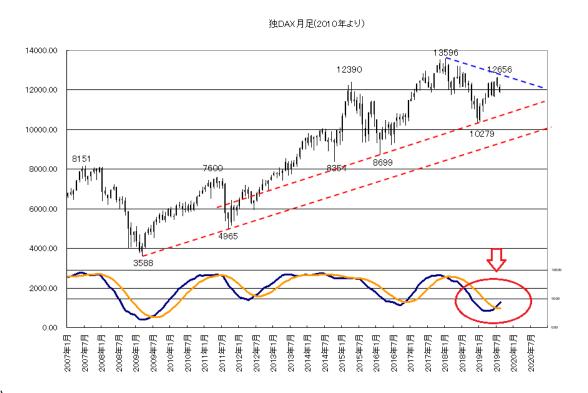


一方こちらは、ドイツの10年物国債利回りです。こちらも一時プラス圏を回復していましたが、既に2016年の一0.2041%も割り込み大きく金利が低下しています。流石に行き過ぎ感はありますが、こういった面からは、市場が催促する形で、今後ECBが、再びマイナス金利政策に突入せざるを得ない状況となりそうです。



下記は、ドイツDAXの株価指数です。高値からは調整していますが、こちらも金融緩和期待やユーロ安が、相場を下支えしています。ただ、欧州景気に対する不透明感が残りますが、テクニカル面から下段のオシレーターが、価格の反転を示唆しています。

今後11000ポイントのサポートが支えることが出来るか注目しましょう。



#### 《日本》

先進国の中では、デフレ傾向は終わったとしても、少子高齢化などの影響で、なかなか物価の上昇が確認できずに、低迷している日本です。

以下が、日銀が四半期ごとに発表する「全国企業短期経済観測調査」のチャートです。

近年は、大企業の製造業と非製造業とも「25-26」のDIが上値を抑えて、その後景気後退局面を迎えています。特に今年は10月の消費増税後の動向次第で、また景気の落ち込みが見えるかもしれません。



一方以下の10年物国債利回りも、こういった面を反映して、再びマイナス圏に突入しています。秋以降 日銀が、追加の緩和策に踏み込む可能性が高そうです。

しかしながら、過去の黒田バズーカ第1弾と第2弾で、日銀の緩和策は尽きています。黒田総裁は、「出来ることは何でもやる」と繰り返していますが、ETFや国債買い入れの増額は限界に近く、マイナス金利の深堀は、金融機関の業績悪化から批判も多く、実現は難しいでしょう。

「出来ることは何でもやる」という意味は、「出来ることが無いから」のようにも聞こえます。また小手先の 方法を取っても、緩和の効果は薄く、それをもって、円相場が大きく売られることは難しそうです。



10年物日本国債・月足(2007年より)

また、株価面では、先進国の中でも、「PBR1倍」程度と割安感があっても、なかなか上昇できていません。原因を何に求めるかは不透明ですが、欧米は中央銀行の緩和余地があるにも関われず、黒田日銀の失策、アベノミックスの期待感も薄れており、外国人からそっぽを向かれた日本株の大きな反発は期待できそうもありません。その面では、日経平均に連動し易いドル円相場も、上昇のサポートに株価を利用することは、難しそうです。逆に大きく落ちれば、リスク回避の動きにつながり易いでしょう。



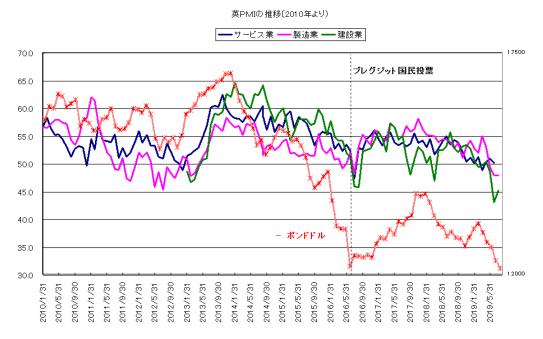
# 《英国》

誰もが、2016年の国民投票で、英国国民が、ユーロからの離脱を選択したことに、驚きを覚えていますが、これに加えて離脱の手続きが、ここまで、長期に混迷するとは、想像もできませんでした。

英国下院議会の混迷は、英経済に悪影響を与えていることは、間違いないでしょうが、更に海外からの不信感を高めたことも至極当然です。今後も海外に逃げ出した企業が、英国に戻ってくる可能性は低そうです。

以下が英国のサービス業、製造業と建設業のPMIの推移を示したチャートです。

ブレグジットに対する不透明感から、一時は揉み合っていましたが、これもどうも、駆け込み需要が支えていただけのようです。現状は製造業や建設業が、景気の分水嶺となる「50」を割り込んでいます。10月末に向けて、駆け込み重要の反動が、今後も続きそうです。



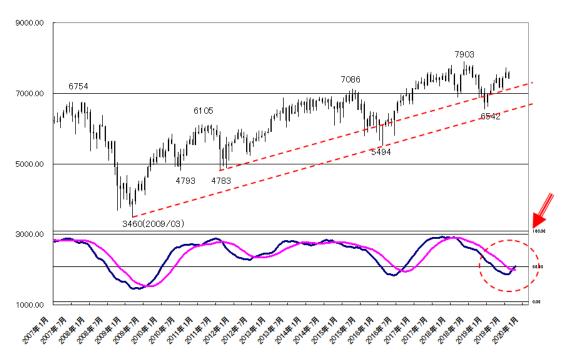
一方、英国の10年物国債利回りも再び調整を強めています。

一時景況感の悪化から、英中銀で利下げの可能性が取り沙汰されましたが、利下げをすれば、ポンド相場の売り圧力となり、ポンド相場が下落すれば、恒常的に経常収支の赤字国である英国では、インフレが高まり易く、そういったインフレが景気の悪化を招くという、悪循環となります。その面では、9月に再開される議会で、どういった協議がなされるかはわかりませんが、ブレグジットの決着がつくまでは、英中銀が行動することは難しく、当面は英国の長期金利も更に下落を強めることはなさそうです。 現状下落を強めているポンド相場ですが、こういった面が下支え出来るか注目しましょう



一方で、株価面では、堅調な展開が続いています。テクニカル面では、オシレーターも買いを支持しています。一部にポンド安が、輸出企業に恩恵を与えているとの見方もありますが、この見方には疑問も多いでしょう。

恐らくですが、ブレグジットが解決するまでは、海外からの投資資金は入り難く、逆に英国国内では、海外に投資できず、あくまで英国国内のマネーが、株に集まっているだけかもしれません。

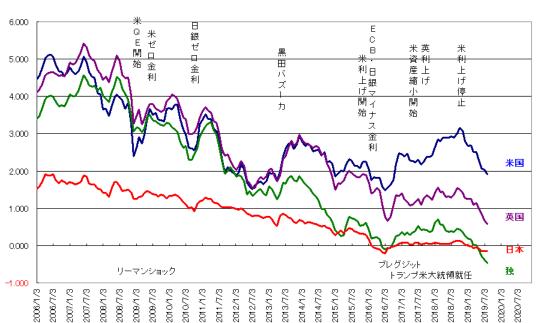


英FT100月足(2007年1月より)

# 《まとめ》

以下が4か国の長期金利を一覧表にしたものです。

リーマンショック後、金利の低下傾向が続いていますが、早々と利上げを実施した米国の金利が未だ高水準を維持しています。もし、FRBが今後利下げを開始しても、未だ相対的に金利が高く、クレジット・リスクの安全性からも資金が集まり易い状況が続きそうです。その面では、今年後半もドルの堅調が続きそうです。



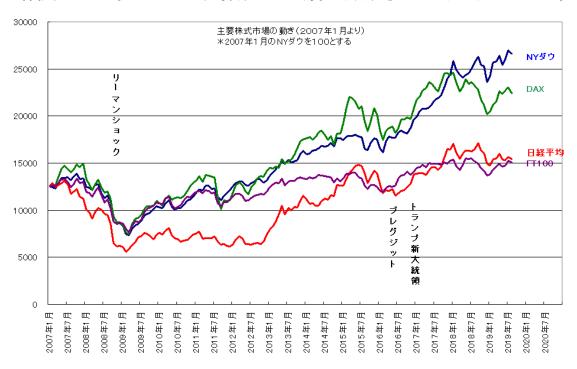
主要国10年物国債利回り(2006年より)

#### 一方株価面からみてみましょう。

以下がリーマンショックからの主要4か国の株価指数の推移です。連動性を見るために、2017年1月のNYダウの価格を「100」として、価格を調整しています。

総じてリーマンショック後、株価は上昇した時代ですが、その中でも、やはり米国のパフォーマンスが最も良好です。次にDAXで、英国と日本はパフォーマンスが、あまり良くありません。この理由としては、英国はブレグジットの懸念が海外からの投資を控えさせているのでしょう。日本では、外国人買いの低迷が指摘されています。この点は、はっきりとしませんが、恐らく少子高齢化が、日本の将来の成長を阻害するとの見方がベースとなっているのかもしれません。

こういった株価面のパフォーマンスが、為替面の人気度にも反映されているかもしれません。



それでは、まとめてみましょう。

恐らく米中貿易戦争の影響が、両国だけに留まらず、今後も世界経済に悪影響を与えるでしょう。そうなると主要国の経済も今年後半に向けて、落ち込みを続ける可能性が高いことになります。

解決策としては、財政政策は、国別の問題として、景気を下支えする意味で、中央銀行の姿勢が重要となります。その面では、やはり緩和余地の高い米国が、今後も世界経済の中で安定度が高いことが想定され、ドルに資金が集まり易い状況が続きそうです。

一方緩和余地の少ない日本やユーロ圏、ブレグジットの懸念が残る英国には、資金が集まり難く、こういった面が年後半もドル相場を支える可能性に注目しましょう。

#### ただ、それでは、何故円売りにならないのか?

この話の中で、疑問を持った方も多いと思いますが、これについて解説させて頂きます。

ここ20年以上、日本では超低金利政策が続いています。そのため、既に多くの資金が、日本から海外に投資されています。

一言では言えませんが、簡単に言えば、「円安は、日本人が作っている」わけです。

こういった面は、「リスク回避」と言えば、直ぐに円が買われることで、明らかです。元来、「リスク回避で、何故円が買われる」のかと思う方も多いでしょうが、例を挙げると阪神淡路大震災や東北大震災後に、円が高値を付けています。

断言すると怒られそうですが、個人的には、日米金利差が、ドル円相場を10円ほど円安に導いていると思います。 そうなると今後米国が、金利を更に調整するなら、ドル円の100円割れもあるかもしれません。

# 【当面の相場見通し】

#### 《当面の重要材料》

以下の今後の3カ月程度の重要材料を掲載しておきます。

尚、日程や予定は、一応現在把握できているものを掲げています。こういった材料やイベントの予定や 発表は、予告なく変更にされる場合がありますので、その点は考慮して対応して下さい。

08月05日:中国共産党・北戴河会議、

08月06日:RBA理事会

08月07日: NZ中銀政策金利公表 08月12日: 東京市場休場(山の日)

08月21日: FOMC議事録(7月30-31日開催分)、カンザス連銀シンポジウム(24日まで)

08月24日: G7サミット(26日まで、仏ビアリッツ) 08月26日: ロンドン市場休場(バンクホリデー)

09月01日:独ブランデンブルク州、ザクセン州議会選挙、米・対中10%のび加関税実施(3000億ドル

相当分)、ヒジュラ暦(イスラム暦)新年

09月02日: NY市場休場(レイバーデー)

09月03日:RBA理事会

09月04日:カナダ中銀政策金利公表

09月11日:一帯一路サミット(12日まで、香港)

09月12日: ECB理事会(スタッフの経済見通し公表、ドラギ総裁記者会見)

09月XX日:英議会・党大会のため休会(10月初旬まで)

09月16日:東京市場休場(敬老の日)

09月17日:第74回国連総会(30日まで、NY)

09月18日: 米FOMC(経済・FF金利見通し公表と議長会見)

09月19日:日銀金融政策決定会合・結果公表、スイス中銀政策金利公表、英MPC(議事録公表)

09月20日:ラグビーWカップ·日本大会開催(11月2日まで)

09月22日:英労働党大会(25日まで)

09月23日:東京市場休場(秋分の日)

09月25日:NZ中銀政策金利公表

09月29日: NZ夏時間移行、英保守党大会(10月2日まで)

10月01日:日本・消費税10%に増税、日経平均銘柄入替公表、中国・国慶節(7日まで)、中国建国70

周年

10月06日:豪冬時間移行

10月07日:シドニー市場休場(レイバーデー)

10月09日: FOMC議事録(9月17-18日開催分)

10月14日:東京市場休場(体育の日)

10月17日: EU首脳会議(18日まで)

10月18日:中国第3四半期GDP、IMF・世界銀行年次総会(20日まで、ワシントン)

10月21日:カナダ連邦議会総選挙

10月22日:東京市場休場(即位礼正殿の儀義) 10月24日:ECB理事会(ドラギ総裁記者会見) 10月27日:欧州・冬時間スタート、独チューリンゲン州議会選挙、アルゼンチン大統領・議会選挙

10月28日:ウェリントン市場休場(レイバー・デー)

10月30日: 米第3四半期GDP・速報、カナダ中銀政策金利公表、米FOMC(パウエル議長記者会見)

10月31日:日銀金融政策決定会合結果公表(展望リポート)、ユーロ圏第3四半期GDP・速報、英EU離

#### 脱期限

10月XX日:ドラギ総裁・任期満了、ユンケル欧州委員・任期満了、米財務省半期為替報告公表、IMF・世界経済見通し公表、ノーベル賞受賞者発表

#### 《今後の相場の焦点》

今年の相場は、各国の金融政策に対する思惑や米国と主要国の通商協議の行方で、荒れた展開が続きましたが、今後はこの2つの問題に加えて、地政学の問題が相場を左右する大きな要因となりそうです。

まず、金融政策に関しては、7月の米FOMCで、米国は10年半ぶりに、利下げを実施しましたが、現状パウエルFRB議長は、これを予防的利下げとして、「利下げサイクルへの突入ではない」と否定しています。一方では、世界的には、景気悪化の懸念も残っています。年後半のFOMCでは、どういった行動を取るのか、市場の大きな注目となりそうです。

加えてECBや日銀もこのまま、弱い景況感が続くと、秋口には、何か対策を打たなければならなくなりそうです。時期は不透明ですが、ECBでは、ドラギ総裁が10月末に任期を迎えます。新しく総裁になるラガルド氏は、ハト派とも言われており、総裁就任直後に結果を求める可能性が高そうです。また、日本では10月から消費増税が実施されます。事前の駆け込み需要の反動が顕著となるなら、どういった方策をもって行動に出るかに留意しておきましょう。

また、10月末に、EUの離脱期限が来ます。ボリス・ジョンソン新首相は、合意出来ない場合も、離脱すると断点しています。こういった思惑が実現見を帯びると、ポンド相場の動きが激しくなりそうです。

一方米中通商協議に関しては、5月の米中協議の決裂から、6月の米中首脳会談を経ても、なかなか協議が進展しないことで、8月に入って、トランプ大統領が、中国からの輸入額の残りの3000億ドル相当に、10%の関税を9月から追加することを表明しました。9月に協議が再開される見通しですが、それでも合意できない場合、トランプ大統領は、来年の大統領中間選挙を睨んで、強硬姿勢を続けるでしょう。もし、関税を25%まで引き上げるなら、すべての中国からの輸入品に追加関税が課せられることになります。その場合、大きなショックが市場に走る可能性に注意しましょう。

また、トランプ政権は、ユーロ圏や日本にも、プレッシャーをかけています。なにがなんでも、貿易赤字を減らしたいようですが、最近では、主要国の自国通貨安誘導が、米国の貿易赤字を招いていると攻撃しています。全くの勘違いだと思いますが、一部で米財務省が市場介入まで検討しているとか、「FRBの使命」として、貿易収支まで考慮するということまで議会の話題となっています。こういった面で、トランプ政権の強硬姿勢が続くと、特に円高の流れが続く可能性に、留意しておきましょう。

尚、地政学リスクに関しては、原油相場の動き次第では、為替市場にも大きな影響を及ぼします。ただ、イランに絡めた中東情勢、更にイスラエル、サウジアラビア、シリア、トルコ、北朝鮮、ロシアや中国まで絡めて、全く予想がつかないので、ここでは取り上げません。ただし、常にその展開には注意して対応しましょう。

# 《ドル円》

ドル円相場は、今年1月3日の「フラッシュ・クラッシュ」の動きをどうにか切り抜け、その後112.40まで 反発しましたが、FOMCの利下げ姿勢の思惑、更に米中通商協議の決裂を受けて、再び安値を目指す 展開となっています。今後を睨むとFOMCの利下げ姿勢が、早々に強まる可能性は低いとしても、米中 通商協議の早期の進展は望めそうもありません。またもし、一部に解決が見えても、テクニカル面では、 弱気が続く可能性が高いでしょう。

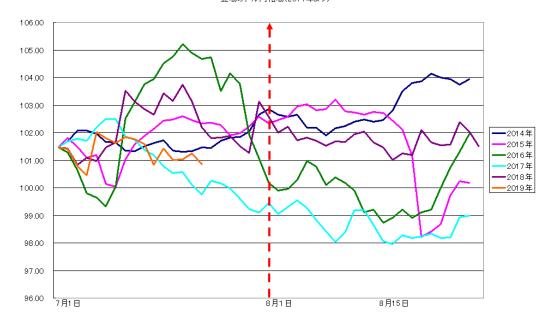
以下の日足チャートをご覧ください。既に日足の雲がしっかりと上値を抑えて、今年の1月3日の安値を目指す展開となっています。現状はそれでも105円のサイコロジカルが、支えることができれば、直ぐに下落は進まないでしょうが、上値は108円台が押さえると弱く、下支えがあっても8-9月は、105-108円程度の相場展開が続きそうです。



ドル円日足(2018年5月より)

また、夏場のドル円相場の傾向にも注意しましょう。

以下は、直近5年の過去7-8月末の期間のドル円の動きを、2014年の7月寄り付きの値段を「100」として、デフォルメしたチャートです。総じて7月は円安傾向も見えていますが、8月に入ると円高になり易い傾向がはっきりと見えると思います。また特に8月の中旬は、一過性の円高が発生することが多いことも注目してください。この要因は、100%ではありませんが、日本のお盆休暇で、参加者が、大幅に減少すること。また、9月末の中間決算を睨んで、「ファンドの45日ルール」などから、解約売りが入り易いことが、要因と指摘されています。ただ、逆にこういった下落は、一過性に留まることが多く、買い場とも言えますので、買いたい人は、そういったタイミングを待つのも良いでしょう。



一方以下の月足チャートをご覧ください。ドル円は、125.86からのレジスタンスで抑えられ続けて、じりじりと下値トライを続け、現状は月足のロング・ランのサポートに迫っています。また下段に示したスロー・ストキャスティクスも反転下落となっていることから、今後も弱い状況が続きそうです。その場合、特に急落気味に円高が進んだ、2018年3月の104.56と今年1月3日の104.87のダブル・ボトムまで割れると下落は、フィボナッチ・リトレースメント(75.31から125.86)の50%となる100.58までターゲットとなる可能性があります。ただ、サイコロジカルな100円は強い位置ですので、当面は支えられるでしょうが、こういった位置まで割れると61.8%の94.62まで視野となる可能性が残ることは注意しておきましょう。



▼8-9月のドル円の戦略

予想レンジ=103.50(105.00)~108.50

戦略としては、108円方向へ戻りから売り場を探して、ストップは109円超え。ターゲットは、105円の動向次第で、維持では買い戻しも割れると103円ミドル程度では利食いを優先したい。買いは、100円に近いレベルを待つのが得策となりそうです。

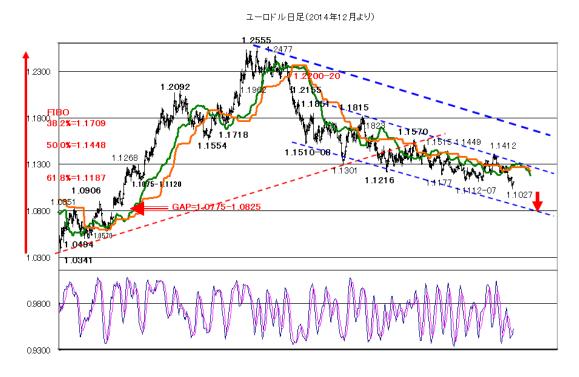
# 《ユーロドル》

なりそうです。

ユーロドル相場は、今年1月の高値1. 1570からの下落スピードは鈍くも、欧州の景気減速、イタリアの財政不安、独仏の政治不安、更にブレグジットの将来的な悪影響を懸念する形で、じりじりと下落傾向を強めています。また年後半に向けて、ECBの追加緩和の思惑も重なって、今後も上値が抑えられる可能性が高そうです。

テクニカル面からは、以下の日足チャートをご参照ください。

現状は1.2555を高値にしたエリオット波動のエクステンション状態(3波か5波かは不透明)にあり、既に1.13台がレジスタンスとして、機能すると弱い状況が続き、1.1412や1.1449の戻り高値を超えるまでは改善が見えそうもありません。ただ、現状がエリオットの第3や5波であれば、今後大きな下ヒゲを出した場合、そこが一旦の下げ止まりポイントとなる可能性があることは注意してください。その場合のターゲットとしては、2017年の相場上昇期のギャップで、現状の下落チャンネルの下限が交わる位置として、1.1075-1.0825レベルに注目しましょう。



一方月足チャートからは、下段のスロー・ストキャスティクスが下落傾向を維持しており、まだ下落余地がありそうです。その場合歴史的なユーロドルの安値O. 8225からのロング・ランのサポート位置を目指す動きも想定されます。ただ、こういった位置が支えられると、既にスロー・ストキャスティクスも売られ過ぎの位置にあって、前述のエリオット波動の動きからも、当面の下値目途となり、買いも検討される位置と



また、以下のチャートは、2008年からのユーロドル相場のサイクルをみたものです。このチャートからは、ユーロドル相場は、過去「半年、1年または2年周期」でトレンドが変化しています。今回も同様の動きとなるか断定はできませんが、現状が2018年1-2月からの下落の流れとなっていますので、これを当てはめるとユーロ相場の底値付き・反転は、2020年1-2月の時期になる可能性が高そうです。



# ▼8-9月のユーロドルの戦略

予想レンジ=1.0800~1.1300

戦略としては、1.2000から1.1300方向への戻りでは売り場探しです。ストップは1.1450超え。ターゲットは、サイコロジカルな1.10が維持されると買い戻しで、割れても前述のギャップの位置となる1.0800前後は、利食い優先が良いでしょう。また、こういった下落での買いは、前述のサイクルを前提とするなら、8-9月は、少し状況をみるのが良いかもしれません。

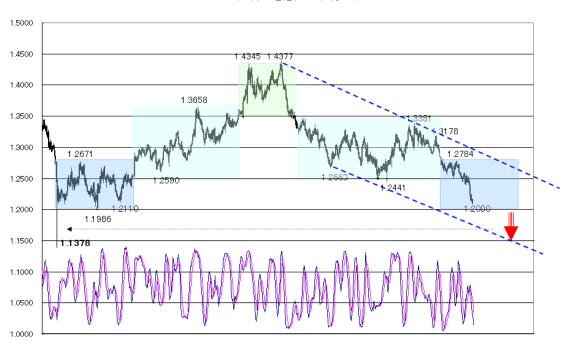
# 《ポンドドル》

ポンドドル相場は、今年3月末のブレグジットの期限でも決着がつかず、更にメイ首相が辞任、新たにブレグジット強硬派のボリス・ジョンソン氏が新首相に就任したことで、下落を更に強める形となっています。ただ、当面は夏休みで、この問題も直ぐに進展する可能性は低く、この材料だけで追いかけて売るのは危険です。

しかしながら、10月末の合意なきブレグジットの可能性を睨むと、当面反発では売りが出易い状況は 続きそうです。

テクニカル面では、以下の日足チャートをご覧ください。1. 4345と1. 4377の高値をダブル・トップに、 一種のH&Sの形状を形成しています。

こういった段階形成から、現状は左側のブルーのレンジの下限となる1. 1986-1. 2110ゾーンに突入しています。つまり、若干下回ったとしても、更に突っ込み売りは避けるべき状況です。ただ、そうなると当面は、左のブルーのゾーンと同じような保合いを右側の相場で形成する可能性が高く、当面1. 20前後から1. 27-1. 28ゾーンとの揉み合いを経て、最終的に割り込んで、国民投票でブレグジットが決定した後の最安値の下ヒゲとなる1. 1378を目指す動きとなる形が理想的です。



ポンドドル日足(2016年9月より)

ただ、こういったH&Sの形が綺麗に出ることは少なく、またこの時期に関しても、10月末のブレグジットがどうなるかによって異なります。また延期となれば、話は異なりそうですが、合意無き離脱が確定すれば、一旦は材料の出尽くしから一時的な反転を見せても、戻り売りに晒されるとみるのが妥当でしょう。

また、この動きが下ヒゲで終わるのか、更に下値を拡大するのかは、ブレグジットが完全に完了した後、 英国経済が、ブレグジットをバネに、立ち直ることが出来るのか、それとも長期の歴史的低迷に陥るのか、 中長期のスタンスでみる必要があります。

その面では、下記の1978年からの超長期の週足チャートで確認してみましょう。

案外大きく動いている姿が確認できますが、総じてポンドドル相場は、1.35-1.37ゾーンを下値圏に、1.72-74ゾーンの上限とのレンジを中心に動きています。ただ、現状はこの下限を割れている形ですから、1.35-37ゾーンが上値を抑えると、同様に1985年の安値を目指す動きとなる可能性があり、1.0500台までターゲットとなる可能性が残っていることは注意しておきましょう。



#### ▼8-9月のポンドドルの戦略

予想レンジ=1. 1700(1. 2000)~1. 2600

戦略としては、基本は戻り売りで、1. 2400から1. 2600までの戻りを慎重に売り場を探して、ストップは1. 2800超え。ターゲットは、1. 20前後が維持されると買い戻しで、割れても下ヒゲの1. 1378を前に、下ヒゲの半値レベルとなる1. 17前後では。利食いを優先しましょう。また、前述のH&Sのレンジを想定するなら、早期は1. 20前後の維持では買いも検討できそうですが、ベンチャー的になり易いので、1. 1980や1. 19ミドルまで割れるなら止めるスタンスは維持しておきましょう。また、利食いですが、1. 2400などが抑えるなら優先するのが良いかもしれません。

以上、当レポートを最後までご覧いただきありがとうございました。



【著者プロフィール】

文一雄 [通称:だいまん] 氏 ( 有限会社フォレックス・ラジオ 代表取締役 )

アジア系外銀にて、外国為替の貿易事務、マネー、債券、為替ディーラーを歴任。ディーリング及び決済関連業務に精通。2002年の資金部次長時代に、20年間勤務した同銀行を退職。銀行在籍時より運営していた外国為替予想サイト「円を救え」をベースに、個人の FX 取引の拡大を支援するために、相場予想及び、為替取引の個人向け実地教育を中心とした活動を実施。2004年より、外国為替をメイン・テーマとしたインターネット・ラジオ「だいまんの為替で大儲け?!」を開始。著書に「外貨建て投資入門&実践ガイド」(エム・ケイ・ニュース社)、

及び「あなたのお金を10倍にする外貨投資術」(フォレスト出版)がある。

# 【ひまわりFXにおける重要事項】

- ●外国為替証拠金取引とは、元本や利益が保証された金融商品ではありません。お取引した通貨にて相場の変動による価格変動やスワップポイントの変動により、損失が発生する場合があります。
- ●レバレッジ効果では、お客様がお預けになった証拠金以上のお取引が可能となりますが、証拠金以上の損失が発生するおそれもあります。ロスカット取引は、必ず約束した損失の額で限定するというものではありません。通常、あらかじめ約束した損失の額の水準(以下「ロスカット水準」といいます。)に達した時点から決済取引の手続きが始まりますので、実際の損失はロスカット水準より大きくなる場合が考えられます。また、ルール通りにロスカット取引が行われた場合であっても、相場の状況によっては、お客様よりお預かりした証拠金以上の損失の額が生じることがあります。
- ●ひまわり FX レギュラーロ座の取引手数料は無料となっています。ループ・イフダンロ座をご利用の際には、投資助言報酬が別途発生し、当該報酬はスプレッドに含まれています。ループ・イフダンの売買ルールは、必ずしも記載通りに取引が行われることを当社が保証するものではありません。
- ●取引レートの売付価格と買付価格には差額(スプレッド)があります。スプレッドは固定ではなく、主要経済指標の発表前後、早朝や主要市場の休日等で市場の流動性が低い時間帯、予期せぬ突発的事象等の発生時には拡大する場合があります。
- ●個人のお客様の取引に必要な証拠金は、各通貨ペアのレートにより決定され、お取引の 4%相当となります。証拠金の 25 倍までのお取引が可能です。法人のお客様の場合は、当社が算出した通貨ペア毎の為替リスク想定比率を取引の 額に乗じて得た額以上の証拠金が必要になります。為替リスク想定比率とは金融商品取引業等に関する内閣府令第 117 条第 27 項第 1 号に規定される定量的計算モデルを用い算出します。
- ●当社は、法令上要求される区分管理方法の信託一本化を整備しておりますが、区分管理必要額算出日と追加信託期限に時間差があること等から、いかなる状況でも必ずお客様から預かった証拠金が全額返還されることを保証するものではありません。
- ●お取引の開始にあたり、契約締結前交付書面を熟読の上、十分に仕組みやリスクをご理解いただき、ご自身の判断と 責任において開始していただきますようお願いいたします。
- ●その他詳細は、ホームページにてご確認ください。
- ■相場状況・分析等の投資判断に影響を与える情報に関連する記載内容における重要事項

当レポートにおける相場状況・分析等の投資判断に影響を与える情報に関連する記載内容は、投資判断の参考となる情報の提供を目的としており、投資勧誘を目的としたものではありません。また、その正確性、信頼性、迅速性を当社が保証するものではありません。投資の最終決定は、ご自身の判断でお願いします。

# ひまわり証券株式会社

関東財務局長(金商)第 150 号(金融商品取引業)

加入協会:(社)金融先物取引業協会・日本証券業協会・(社)日本投資顧問業協会